

巻頭エッセイ

数学と外国学

東京外国語大学 教授 中嶋 嶺雄

現在、私たちの東京外国語大学へ入学するためには、共通1次試験を経なければならぬので、その限りにおいて、数学は必須だといえよう。しかし、2次試験が重視される本学の場合、2次には数学がないのだから、数学が苦手な諸君、あるいは共通1次の数学に失敗した諸君にも、合格への道は十分に開かれている。つまり、ヒアリングを含む外国語の試験がしっかりできていれば、合格の可能性はきわめて高いといえよう。

入試に関しては、上記の通りであるが、外国語を修得し、さらにそれらの外国語（英語および他の外国語）を武器にして外国学（Foreign Studies もしくは International Studies）を目指すようになった場合、数学はどの程度必要だろうか。一般的には、数学もよくできるにこしたことはない。最近では、国際関係論（International Relations）においても、計量的な分析や統計・確率を駆使した研究分野が広がりつつあるし、国際経済を研究するような人にとっても数学は必要だといえよう。



なかじま みねお

1936年松本市生まれ。

1960年東京外国語大学中国科卒業。1965年東京大学大学院国際関係論課程卒業。社会学博士。

現在、国際関係論および現代中国学・アジア地域研究を東京外国語大学外国語学部および同大学大学院地域研究研究科で教えている。著書は、サントリー学芸賞の『北京烈烈』（筑摩書房）、『中ソ対立と現代』（中央公論社）など多数。日仏共同研究をまとめた編著『中国の戦略』を最近パリで刊行し、世界の中国学界の幹を築めたハーバード大学編『中国史叢書』にも執筆するなど国際舞台の第一線でも活躍中。

だが、世の中には、語学や人文・社会科学分野の科目は得意だが、こと数学だけは苦手だという人も多いはずである。私もその1人だったけれど、そのような人にとっては、英語や社会科の科目は難なく得点できるのに、数学は少しぐらい勉強しても、難しくてついていけないといったケースが多いのではないか。このような人たちにとって、東京外国語大学は大いに可能性のある大学であろうし、21世紀に向けて、いよいよ我が国が本格的な国際化時代を迎えようとしている今日、外国語を学び、さらに外国研究、特に国際関係論や地域研究（Area Studies）を勉強することの重要性はますます大きくなってきている。そして、このような分野の研究には、実際のところ数学は、ほとんど必要でない。なまじ数学的思考で国際社会をとらえようとする、どうしても無機的で薄っぺらなものになってしまい、まるで実験室のなかの蒸留水のような世界認識になってしまうことの方が多い。国際社会も国際関係も、結局は、人間および人間集団が形成するものであるから、そこには愛憎渦巻くドロドロした現実が存在するのである。このような分野を人間の原点に立ち戻って追求するためには、やはり人文・社会科学的な鋭い問題意識と方法論が必要なのであって、それは数学とは別の世界の事柄だと私は確信している。その意味では数学の苦手な諸君こそ、21世紀に向けて大いに期待される人材なのだ。

マンスリーアプローチ受験講座

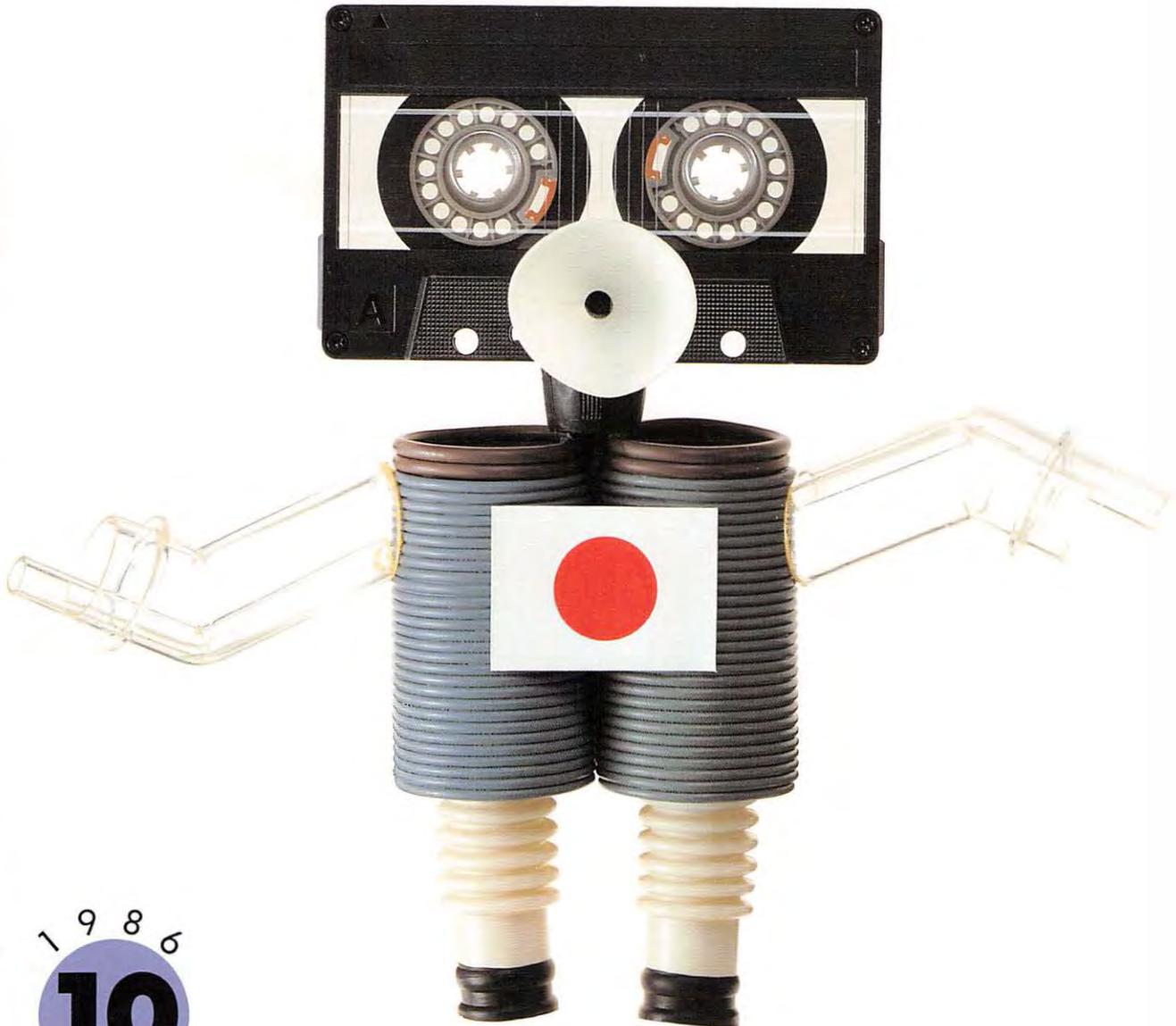
受験数学I・II

●今月の学習内容

数学I
数学II/基礎解析
特集/数列
入試情報

●添削課題

- ① 連立方程式の解法, 有理数と無理数
- ② 2次方程式の解の判別
- ③ 3角形の面積と最大値
- ④ 関数の極値, 面積
- ⑤ 球を取り出す確率



1 9 8 6
10